

平成 25 年度 東京都内湾水生生物調査 5 月付着動物調査 速報



●実施状況

平成 25 年 5 月 22 日に付着動物調査を実施した。例年は 10 月初旬に行われていたが、秋季では付着動物が落下してしまいうため、今年度は落下する前に調査を行うこととした。天気は晴れで、気温 21.1～24.2℃、風速 1.6～2.2 m/s で弱い南東の風が吹いていた。当日は中潮で、8 時 51 分干潮、15 時 25 分満潮であった(東京都港湾局のデータ)。各地点の概況を下表に示す。

2013/5/22	中央防波堤外側(その 2)東側		13 号地船着場	
調査時間帯	9:40～11:05		11:38～12:40	
水深(m)	4.8		6.5	
天候	晴れ		晴れ	
気温	21.1		24.2	
風向/風速(m/s)	SE/2.2		SE/1.6	
波浪(m)	0.1		<0.1	
水色	緑色・濃(暗)		褐色・濃(暗)	
透明度(m)	3.2		0.6	
観測層	上層	下層	上層	下層
水温(℃)	22.3	20.9	23.8	20.2
塩分	17.6	30.6	23.9	30.2
pH	8.11	8.06	8.81	8.04
DO(mg/L)	6.93	3.54	17.1	3.84
臭気	無し	無し	無し	無し
備考			当日付近ではヘテロシグマ属主体の赤潮が発生し、透明度が 1m 未満であった。	

観測層：上層(0m)・下層(海底面-1m)、潮汐時刻：東京都港湾局のデータ

●調査地点の状況

	中央防波堤外側(その 2)東側	13 号地船着場
概況写真		
備考	中央防波堤外側埋立地の外側岸壁に調査地点を設定	中央防波堤埋立地へ通じる第二航路海底トンネル排気塔の南にある船着場の、西側岸壁に調査地点を設定

●観察結果の概要

○ 中央防波堤外側(その2)東側

付着している生物の量は全体的に少なく、海底にはイガイ類の死殻が堆積していた。

被度(基盤を覆う面積比)が比較的高かった種類は、上方からイワフジツボ、ムラサキイガイ、カンザシゴカイ科、カタユウレイボヤ、多毛類の泥巢(泥分を主体としたもの)などであった。

ムラサキイガイは潮間帯(AP+1.3m)から海底にむかい、高い被度で出現し始め、新規加入個体がマット状に広がっていた。また、深くなるに従い、新規個体は少なくなっていた。潮下帯(AP-1.1m~3.0m)にかけてはカタユウレイボヤが卓越し、他の生物の付着は少なかった。

潮下帯(AP-3.0m)からは多毛類の泥巢が卓越していた。海底は、イガイ類の貝殻や多毛類の棲管の脱落したもの、カニの死殻などが散在していたが、嫌気性バクテリアはみられなかった。

○ 13号地船着場

付着している生物の量は、中央防波堤と同様に全体的に少なかった。鉛直的な分布も中央防波堤とほぼ同じで、生物の種類数や量は、水深の浅い側では比較的多かったものの、下方では少なかった。

被度が比較的高かった種類は、上方からイワフジツボ、カンザシゴカイ科の棲管(石灰質で生死不明)、カタユウレイボヤ、多毛類の棲管(泥分を主体としたもの)であった。潮下帯(AP-0.8m~3.8m)でカタユウレイボヤが卓越し、他の生物が付着できないほど覆っていた。移動性のイボニシ、レイシガイが出現したが、中層にカタユウレイボヤが卓越した為か、上層と下層に別れて生息していた。

海底には、イガイ類の貝殻や多毛類の棲管の脱落したものが堆積していたが、嫌気性バクテリアはみられなかった。



イワフジツボ —中央防波堤—

潮間帯の上部に優占した。小型のフジツボで、東京内湾域で代表的な種である。



ムラサキイガイ —中央防波堤—

外来の付着性二枚貝で、港湾の防波堤等に高密度に付着する。東京内湾域で代表的な付着生物である。



タテジマイソギンチャク -中央防波堤-
一体の表面に縦縞があるためこの名前が付いた。全国の潮間帯に普通に見られるイソギンチャクである。



カタユウレイボヤ -中央防波堤-
半透明の小型のホヤ類で、内湾域の岩礁や護岸等で群体を作って基質に付着する。



イシガニ -13号地-
東京内湾域に普通に生息するやや大型のカニ。遊泳脚を持ち移動能力が高い。食用となる。



イボニシ -13号地-
潮間帯の岩礁に多い。殻の表面は丸いこぶ状の突起で覆われる。肉食性の貝で、他の貝を捕食する。



マヒトデ -13号地-
東京内湾域の砂泥底に普通に生息する。肉食性で主として海底の二枚貝を捕食する。



アカニシ -13号地-
内湾の主として水深 10~20mにすむやや大型の巻貝で、殻口内は赤い。他の貝を捕食する。食用となる。